



魔界「若妻編」

大黒達也

『魔界（若妻編）』

作者 大黒達也

一・ あらすじ

格安の国内新婚ツアー。それは美しい容貌肢体を持ち、瑞々しくかつ成熟した若妻達の柔肉を狙う巧みな陥穽であつた。外部から隔絶された陸の孤島で、若妻達の肉体を食材とした人肉宴会が繰り広げられる。序盤では、若妻達は、夫の目の前で陵辱の限りを尽くされる。

二・登場人物

立花 ゆかり（タチバナ ユカリ）

年齢二十五歳、身長百六十五センチ。新婚。肩まで伸ばしたストレートの茶髪に、くつきりとした二重瞼を持ち、愛くるしいという表現がぴったりの顔立ちをした女性であった。

片桐 史郎（カタギリ シロウ）

身長百八十二センチ、体重七十五キロ。警視庁公安一課の敏腕警視。テロリスト集団を単身で殲滅させるほどの凄腕の持ち主。

山口 綾乃（ヤマグチ アヤノ）

年齢二十三歳。身長百六十八センチ。美しい容貌肢体の持ち主。ツアーコンダクターとして敵地に潜入するが、

身元がばれ激しい陵辱の末に

調理され……。

**加納 圭吾** (カノウ ケイゴ)

世界的な人肉売買組織の長。年齢は三十代。冷酷で沈着冷静な性格の持ち主。

**楊** (ヨウ)

中国人。年齢二十六歳、モデルも及ばぬ美貌の持ち主。バイセクシャルで若く美しい女を犯し、食することに無上の喜びを感じる女。加納の忠実な部下であり、愛人でもある。

**細田 宏** (サイダ ヒロシ)

ゆかりが以前勤めていた会社の経営者。人肉宴会ツアーに参加し、ゆかりの肉体を我が物にしようと企む男。  
年齢四十代。

三・目次

第一章 雨の来訪者

第二章 前菜の女達

第三章 肉奴隸

第四章 人肉オークション

第五章 陵辱の宴

第六章 婦警料理

第七章 若妻達の美肉

## 第一章 雨の来訪者

午後八時十八分、車窓を叩く雨音がいつそう激しさを増していくのが感じられた。二十人乗りのサロンバスには、八組の若いカップルがシートに腰掛けていた。

最後部席に座っていたカップルのうち、ひとりは一世代半ばくらいで、肩まで伸ばしたストレートの茶髪にくつきりとした二重瞼を持ち、愛くるしいという表現がぴったりの顔立ちをした女であった。女の名は、立花ゆかり。二十五歳になったばかりだ。隣に座り、小さな寝息を立てている痩せ型の男は、夫の立花省吾。ゆかりより三つ年上の二十八歳であった。

二人は昨日、横浜のホテルで挙式を挙げたばかりであった。新婚旅行は、当初、ハワイを予定していたが、海

外はテロ事件が頻発し、非常に危険な状況にあり、急遽、国内の北海道旅行に変更せざるを得なかった。周りに座っている他のカップルも同じような事情であった。この新婚ツアーが少し変わっているとすれば、全員が美男美女のカップルであるというぐらいだ。

ふたりが新婚旅行の行き先に迷っているまさにそのとき、旅行案内がダイレクトメールで送られてきた。しかも、この新婚ツアーは激安の上に、景品までつくというもので、経済的にはそんなに余裕が無い若いカップルにとっては非常に魅力的なものであった。大手旅行代理店が企画したツアーなので、誰も内容を疑いはしなかった。

ゆかりは、夫の省吾と、横浜郊外にアパートを借りているが、生まれは北海道の室蘭市であった。道央出身者のゆかりにとって、道内旅行は珍しいものでは無かったが、横浜出身の省吾は、この旅行を楽しみにしていた。

ゆかりは浅い眠りにについている省吾の左手を軽く握りながら、窓外を見るとは無しに見ていた。車外は暴風が吹き荒れ、雨足も強く、ほとんど何も見えなかった。ゆかりには、現在バスがどの辺りを走行中であるか、何となくはわかっていた。道東の中央に位置している阿寒町を指しており、バスは深い山間地に造られた道道を走行していた。

ふと、ゆかりは、口を半分開けて眠りほうけている省吾の寝顔に目を向けた。省吾は大手家電会社の部品工場



に勤務する技能師であった。ゆかりは、物静かで、口数が少なく愛情表現が豊かとは言えない省吾を心から愛していた。省吾が自分のことを深く愛してくれていることを感じていた。

昨夜のホテルでの甘いひと時を思い出し、胸の奥が熱くなるのが感じられた。ベッドの上で省吾は、ゆかりの全身を貪り尽くした。省吾の前で全てを曝け出していた。長く形のよい太腿を押し広げられ、臍とアヌスを存分に舐められた。クリトリスを吸われ、アヌスを指で弄られながら何ども絶頂に達していた。省吾の引き締まった浅黒い胸に抱かれ、黒々とした男根に刺し貫かれ、大きな喘ぎ声を上げていた。

ゆかりは昨夜のことを思い出しながら、身体の奥が火

照ってくるのが感じていた。今すぐにも省吾に抱いて欲しかった。

その時、バスがタイヤを軋らせて、路肩に急停車した。

「危ないじゃないか！」

運転手が窓を開け、暗闇に向かって声を荒げた。

「すみません。車がエンストしてしまつて。近くの町まで乗せてもらえませんか？」

窓の外から男の声が聞こえて来た。

「どうする？」

黒縁メガネを掛けた中年の運転手が、近くに座っていた添乗員の山口綾乃に声をかけた。綾乃は二十代の始めくらいで、ストレートの茶髪を肩先まで伸ばし、美しい顔立ちをしていた。

「乗せてやりましょうよ。こんな山奥に残してはいけな  
いでしょう」

「そうだな」

運転手はいかにも面倒だといわんばかりに、荒々しい  
手付きで自動ドアの開閉レバーを操作した。

「本当に、済みません。助かりましたよ」

三十代後半くらいに見える男が、運転手に頭を下げな  
がら乗ってきた。男は身長が百八センチ以上あり、天  
井に頭をぶつけないようにして座席の間の通路を歩き、  
ゆかり達が座っている最後部席のひとつ前の空席に腰掛  
けた。持ち物といえば中くらいのポストンバックだけだ。  
床に置く際にドスンという大きな音を立てた。男が着て  
いた紺色のブレザーから、水滴が滴り落ちていた。男は、

ゆかりの方を振り向いてきた。

「凄いい雨ですね」

「ええ。本当ですね」

ゆかりは浅黒く引き締まった顔をした男の笑顔に一瞬引き込まれた。

「ご旅行ですか？」

眠りから覚めたばかりの省吾が、男に声をかけた。

「ええ。まあ。そんなところです。初めまして。片桐史

郎と申します」

「ああ。どうも。初めまして。私は、立花省吾。こっちは家内のゆかりです」

「すみません。ここで着替えてもかまいませんか？」

「どうぞ。いいですよ」

省吾がゆかりの方をちらりと見ながら答えた。

片桐は、ボストンバックを慎重な手付きで開け、中から黒色のTシャツとジーンズを取り出した。ずぶ濡れになったブレザー、Tシャツそれに穿いていたジーンズを脱いでいった。

片桐は二人の前席に座っているので、下半身は見えなかったが、見事に鍛え抜かれた上半身が二人の視線を貫いた。ゆかりは慌てて目を反らせた。片桐の筋肉はボディビルで鍛えたようなものでは無く、恐ろしいまでにシヤープであり、無駄が無かった。

それから三十分くらいでホテルに到着した。新婚ツアーのメンバーが降り立ったのは、周囲に黒々とした原生

林が生い茂る白亜のリゾートホテルであった。二十階建てのホテルの駐車場にサロンバスが停車して、ホテルの従業員達が、ツアーメンバーの荷物を下ろしていた。

「物凄い山奥みたいだな」

省吾が物珍しそうに、ホテルの照明によって暗闇の中に浮かび上がる針葉樹林の林に魅入っていた。

「周りにはホテルも民家も見えないわね」

ゆかりが省吾の腕に掴まり、小声で呟くように言った。

「そうだな。まるで陸の孤島のようなだ」

省吾の声が独り言のように聞こえた。

客達は、添乗員の綾乃に導かれ、ホテルの一階ホールに集まった。

ゆかりは、天然大理石ばりのフロアと二十階上まで

続く吹き抜けに圧倒されていた。しかも、客層は白人や黒人などの外国人が大勢を占めていた。時折、ゆかり達一行を盗み見ているようで、何か不安なものを感じていた。

「こんな山奥に、随分と外人が多いな」

省吾が感心したように周囲を見ている。

「そうね。でも何だか皆に見られているようで気味が悪いわ」

「新婚ツアーが珍しいのかな。俺はあんまり気にならな

いよ」

「あつ。あの人片桐さんじゃない」

ゆかりが言うように片桐はフロントで、宿泊の手続きをしているようだった。

「このホテルに泊まることにしたようだな」

「皆さん。これからルームキーを渡します。各自でお部屋にお入り下さい。朝食は午前7時からとなっております。何かご不明な点はございませんか？……私は三〇四号室におりますので、室内の電話でのご連絡下さい。なお、お気付きかと思われませんが、携帯電話は使えません。圏外となっておりますので」

二人は手を繋いで、綾乃の説明を上空という感じで聞いていた。夕食は、ここに来る途中、道の駅のレストランで済ませていたので、後は風呂に入って眠るだけだ。

ゆかり達の部屋は、最上階の二十階にあった。南向きの部屋で、広大な針葉樹林帯をどこまでも見渡すことができた。部屋に入るなり、省吾はゆかりに抱き付いて来



た。

「先にお風呂にしましょうよ」

ゆかりが甘えた声で言った。

「お前の匂いが好きなんだよ」

耳元に省吾の荒い息を感じた。スカートを剥ぎ取られ、ワンピースを脱がされた。もどかしげな手付きでブラジャーとパンティを脱がされた。シミ一つ無く、真っ白な裸身が輝いていた。二十五歳の裸身は瑞々しく、しかも成熟した女の色香を発散させていた。省吾の手によって、広大なダブルにうつ伏せに横たえられた。省吾の熱い舌が尻の合間を彷徨っていた。アヌスを存分に舐られ、ゆかりは、両手で白いシーツを握り締め、喘ぎ声を漏らし

続けた。

突然、仰向けにされ、腰を両手で持ち上げられた。省吾の頭が、自分の股間に張り付いていた。熱い舌が、臍やクリトリスを舐っていた。

「今回の食材は最高級だな」

上下黒色のスーツを着た中肉中背で三十代くらいの男が、深々とした一人掛けのソファに腰掛、四十二インチ型の液晶ディスプレイに魅入っていた。ディスプレイにはゆかりと省吾のラブシーンが映し出されていた。

「そうね。女は脂が載って最高においしそうだし。男の方も、ハンサムよね。こいつのチンポは私が予約しておくわ」

近くのソファに座っていた二十代くらいの美しい顔立

ちをした女が、答えた。女は真紅のドレスに身を包んでいた。

「そうだな。女の肉付きは最高の状態だ。太腿はむっちりとしていて、ステーキにしたらさぞかし、美味だろう」

男の右手でワイングラスを弄んでいた。

「ステーキか……。そうね。脂身が載っていて舌の上で蕩けそうね。あの少し大き目のお尻は刺身があいそうよ」

「シミひとつなく、何と柔らかそうなんだ。グリルで焼き上げてもいけそうだ。今回は世界中から、人肉料理の巨匠を招いているから、期待していい」

「最高級品質の女肉を食材とした料理が味わえるのね」  
「そういうことだ」

男は不敵な笑みを浮かべながら、赤ワインを一気に飲

み干した。

その頃、ゆかりは省吾に後背位で膣を貫かれていた。

省吾の黒々とした男根が、ゆかりの膣の中で縦横無尽に暴れていた。ゆかりはこれまでに、省吾の舌や指で何ども逝かされており、快感は極限まで高まり、忘我の域を漂っていた。

何ども鋭い喘ぎ声を上げ、豊満な裸身を震わせていた。

「いくぞ……。ゆかり！」

省吾の声が聞こえて来た。男根が膣の中で弾けた。子宮の奥まで精液が迸った。ゆかりも呼応するように絶頂に達した。省吾の口がゆかりの口を塞いできた。舌を吸い出され、しゃぶられながら余韻に浸っていた。

その頃、五階に部屋を取った片桐史郎が、バスローブを着てソファに座っていた。シャワーを浴びた後なのか、黒々とした短髪が濡れていた。

目の前のガラステーブルには、雨に濡れたポストンバックが置かれていた。片桐はファスナーを引いて、中からハンディタイプの携帯用無線機を取り出した。電源を入れてみたが、何処にも通じなかった。衛星通信方式なので、場所が深い山奥であることは無関係と思われる。近くに強力な妨害電波の発生源がある筈だった。片桐は、窓のカーテンを開け放った。

ホテルから漏れる明かりが、前方の絶壁を薄っすらと浮かび上がらせていた。その上方に強力な照明が灯された巨大なアンテナが聳え立っていた。片桐は不敵な笑み

を浮かべ、カーテンを閉じた。

ソファに戻り、ボストンバックから黒光りする自動拳銃二丁を取り出した。二丁ともシグザウエルP二二六だ。

装弾数十五発、九ミリパラグラムを発射する。非常に精度が高い銃として知られている。片桐は立ち上がり、ベッドまで移動して枕の下に一丁を隠した。残りの一丁はビニール袋に包んでトイレの貯水槽の中に隠し込んだ。

さらにボストンバックからK&M社製のMP五と三十連マガジン三ケを取り出し、それらをビニール袋に入れ、ベランダに出て、そこに置いてあった鉢植えの蔭に隠した。最後にボストンバックから取り出したのは、手投げ弾五発であった。一人かけソファを裏返しにし、ナイフで穴を開けて、中に詰め込んだ。その上に座ってみて違

和感がないかどうか確かめた。特に問題は無かった。

ボストンバックには、その他にも多数の拳銃やサブマシンガンが残っていたが、そのままの状態で、クロークの中に入れた。今度は、部屋に備え付けの小型冷蔵庫から缶ビールを取り出し、ベッドに腰掛、ゆっくりと飲み始めた。

その時、ドアをノックする音が聞こえて来た。片桐の右手が枕の下に伸びた。

「私よ。史郎」

その声を聞いて片桐の顔が一瞬曇った。ドアに駆け寄り鍵を外し、ドアを開け、外に立っていた女を中に引き摺り込んだ。女は添乗員の山口綾乃であった。

「正気か？」

片桐が押し殺した声で問い掛けた。

「大丈夫よ。貴方と私はバスで知り会ったことにすれば、客と添乗員の恋なんか珍しくないわ。それに奴らは、あの新婚カップル達に夢中よ」

「そんなことをわざわざ伝えに来たのか？」

片桐が苦笑いを浮かべながら、冷蔵庫から缶ビールを一本取り出し、綾乃に手渡した。綾乃は部屋に入り込んで、テレビの下やナイトテーブルの裏側を覗き込んだ。

「大丈夫だ。隠しマイクの類は見つからなかったよ」

「貴方はノーマークということね」

「それと、此処では無線が使えない。強力な妨害電波の発生源を見つけた」

「そうなの。本部には連絡できないのね。これ宿泊者名



簿のコピーよ」

綾乃は持っていたA4サイズの紙を手渡した。片桐はそれにぎっと目を通した。

「綾乃の初仕事という訳か……。凄いな。まるで国際会議だ。財界の大立者や有力者が勢ぞろいだな」

「本当ね。驚いたわ。各国の要人達が集まっているのよ」

「今回の仕事がそれだけ危険という訳だ」

「そうよ。だから貴方のところに来たの」

綾乃はそれだけ言うと、着ていたスーツとスカートを脱ぎ始めた。ブラジャーとパンティも脱ぎ去り、素っ裸となった。シミ一つ無い、二十三歳の瑞々しい裸身が片桐の視線を貫いた。

「シャワーを貸してね」

綾乃は盛り上がった白い尻を振りながら、シャワールームに消えた。片桐は冷蔵庫からもう缶ビールを取り出しベッドに腰掛飲み始めた。

それを呑み終わるころに、綾乃がシャワールームから出てきて、洗い髪のまま、片桐に飛びつくように抱き付いてきた。片桐をベッドに押し倒し、バスローブからはだけた男根に喰らいつき音を立てて吸い始めた。片桐の男根を貪る綾乃の盛り上がった白い尻が淫らに揺れ動いていた。

翌朝、ゆかりは、夫の省吾と朝食のためにホテル二階にあるレストランに向かった。広さ二百坪ほどもあるレストランの内部にはバイキングコースの料理が並べられ

たテーブルが中央に設置されていた。周りをいくつもの丸テーブルが取り囲んでいた。

ゆかりは料理をざっと見渡した。大好物の生ウニがトレイの上に敷き詰められているのを見て、頬が緩んだ。

他にも豪華料理がたくさん並べられていたが、メロンやブドウ等のフルーツの分量が多いのに驚かされた。周りを見渡すと、ゆかり達と同じ新婚カップルしかいなかった。昨夜、一階のフロントにいた大勢の客達の姿は見えなかった。

「何か、人が少ない感じね」

「気にすることはないさ。それにしても朝から随分と豪勢だな。ゆかりの大好物が並んでいるよ」

「本当ね。目移りしちゃうわ」

「俺はお前が好物だけだな」

省吾がそつとゆかりの手を握ってきた。

「馬鹿」

ゆかりは小さく言った。頬がほんのりと赤くなっていた。ふたりは、食べ切れないほどの料理をトレイに載せて、原生林の森を見渡せる窓側の席に座った。

「ここ眺め最高だな」

省吾が満面に笑みを浮かべ、ゆかりに話し掛けてきた。

「そうね。料理も最高だし」

ゆかりは、ウニ丼を片手に持ち箸を付けた。最高の味であった。舌の上で甘いウニが蕩けていた。

「北海道でもよかったな」

「そうね。海外では食べれない味よね」

## 第二章 前菜の女達

その頃、ホテル三階にある別のレストランでは、新婚ツアー以外の客達がテーブル席についていた。壁の一面に備え付けられた巨大スクリーンには、ホテル二階レストランで食事中的の新婚ツアー客達の様子が映し出されていた。

上下黒色のスーツを着た加納が、ステージに立ちマイクを持った。

「おはようございます。ご気分はいかがですか？さて、いかがです。スクリーンに映し出されている若妻達は？皆、美しく最高に美味しそうではありませんか？三日後の満月の晩に、彼女達を食していただきます。それまでは、存分に好きなだけ廻り抜いてけっこうです」

加納が、客達に向かつて軽くウインクすると、場内にどよめきが広がった。

「本日は、前菜ということ、若い娘をふたり用意しております。忍と京子です。二人とも有名大学に通う女子大生です」

加納の言葉が終わらぬ内に両扉が開かれ、両手両足を長さ二メートルの棒に縛り付けられた全裸の女二人が、調理服を着て屈強な身体付をした男達四人に運びいれられた。まるで生け捕りにされた獲物を運んでいるかのようであった。

二人とも美しい顔を恐怖に歪ませていた。白い裸身にはシミ一つ無く乳房や尻は見事に盛り上がっていた。テーブル席の真ん中に設けられた調理スペースに運ばれ、

手足を拘束していた細紐を切られ調理台の上に横たえられた。

「どうですか？ふたりともピチピチしていて、美味しそうですね。ホワイトさん。匂いを確かめてくれませんか」

頭部が禿げ上がった白人の男が、席を立ち調理スペースに入り、忍をうつ伏せに押さえつけて、尻の割れ目に顔を押し付けた。忍は肩を震わせ咽び泣いていた。

「最高の状態だ。俺が保証する」

白人男が紅潮した顔を上げ、興奮した口調で言った。

「京子の方はいかがですか？」

白人男は、目にいっぱい涙を溜めて、震え慄いている京子を仰向けにして、両足を持ち上げ、マングリ返し

の体勢にして、剃髪され無毛となった臍に鼻先を押し込んだ。

「ふうむ。いい匂いだ。食欲をそそるよ」

独り言のように呟いた。他の客達は興奮と羨望の眼差しで、忍と京子の裸身に魅入っていた。

「ホワイトさん。有難うございました。それでは調理を始めてください。そうそう、調理を始める前に、簡単に段取りを紹介しておきましょう。ふたりは四人の調理人によって、料理されます。シェフ北村、本日の料理を説明して下さい」

四人の中でも最も大柄な男が、ビキニ姿のコンパニオンからマイクを受け取った。

「初めまして。料理長の北村と申します。本日の食材と



して用意しましたのは、二人の美女、忍と京子です。捕獲してから約一ヶ月の間、果物と穀物のみで飼育いたしました。京子の方は穀物を多めに与えております。

さて、より多くの果物を与えジュシーな状態にある忍は、生き造りにします。最初に血液を五十%排出させて、仮死状態します。腹部を開き、レバーを取り出します。

この時点では、切り裂いた腹部を縫合し、それ以上出血しないように処置します。まずは新鮮な美女のレバ刺しをご堪能下さい。次に肩肉、尻肉そして腿肉を刺身と寿司にしてご賞味いただきます。

京子の場合は適度に脂身が載りましたので、切り捌いて柔肉を切取ります。腿肉はステーキに、より脂のつた尻肉はシャブシャブにします。内臓は焼き鳥風に串焼

きにします。他の肉は唐揚やカツにします」

「刺身にシャブシャブですか。本日は和のテイストがテーマですね」

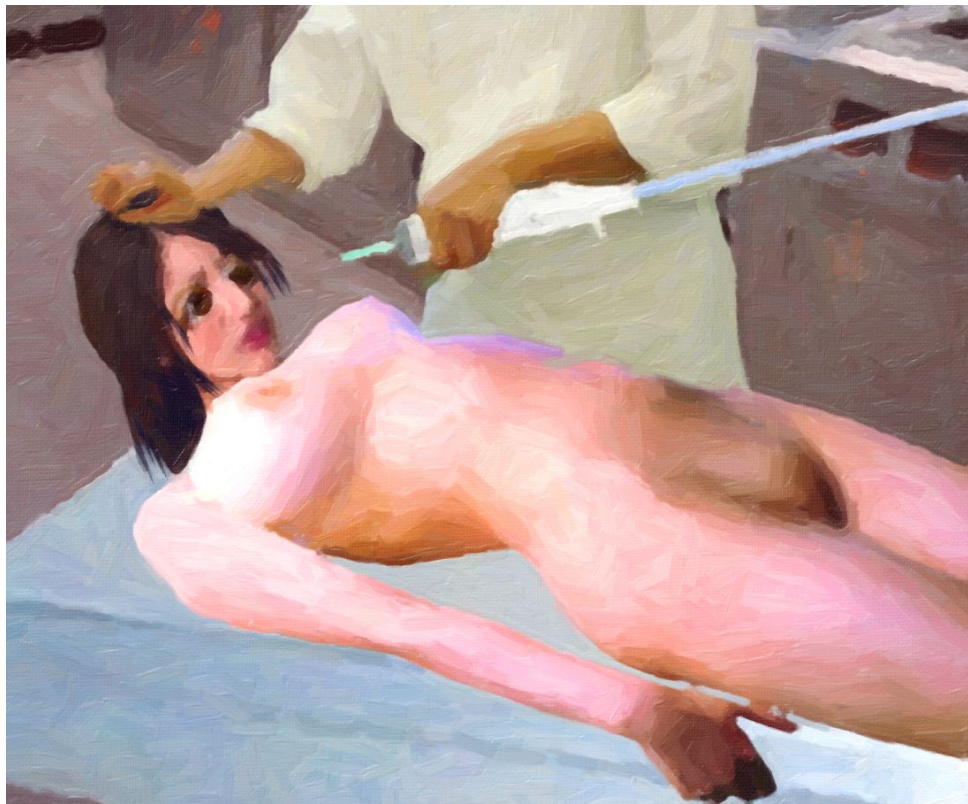
「はい、外国の方も多くいらっしゃいますので、本日は伝統的な日本料理を堪能していただくと思っています」

「そうですか。日本料理は食材の鮮度が重要ですから、期待できますね」

加納は調理台の上で震え、嗚咽をあげ、咽び泣いている二人の美女に視線を向けた。二人は完璧な美貌とボディを持っていた。

「さて、料理を始めて下さい」

屈強な身体つきをした四人の調理人達がふたりずつ組



になって、忍と京子の身体を押さえつけた。

料理長の北田が、忍の髪を鷲掴みにして、長い管に繋がった注射器を忍の首筋に突き立てた。すぐに管の中に新鮮な血液が流れ出した。管の先はポンプに繋がっており、吸い出された血液は、十リットルは入るガラス製の容器に排出されていった。忍は大きな瞳を見開き、管の中を流れる自分の血液を見ていた。

ガラス製の容器に溜まった血液が一リットルを超えるくらいになると、忍は眠るように意識を失い、調理台の上に横たわった。北田は注射器を調理台の上に置いた。部下の調理人が北田に研ぎ澄まされた刺身包丁を手渡した。

北田が忍の腹部の横を片手で押さえつけ、刺身包丁で腹部を縦に切り開いた。脂肪層を切り裂くと色とりどり

の内臓が露になった。両手を切り裂かれた腹部に差し込んだ。すぐに血塗れの肝臓を取り出した。部下の調理人が手際よく、切り裂かれた腹部を縫合した。

北田が血塗れの肝臓を観客達によく見えるようにさし上げた。観客達の中に割れんばかりの拍手と歓声が広がった。北田は、切取った忍の肝臓を調理台の上に置き、薄くスライスし始めた。それらは皿に盛り付けられ、観客達に振舞われた。

四十代くらいの肥太った中年女が、スライスされた肝臓をワサビ醤油につけて、口に入れた。

「デリシャス！」

女は大きな声で叫び満面の笑みを浮かべた。一方、忍の隣に置かれた調理台では、京子の処置が始まろうとし

ていた。京子は、両手両足を調理人達に掴まれ、うつ伏せに横たえられていた。盛り上がった白い尻がぶるぶると震え慄いていた。調理人が巨大な中華包丁を宙に振り上げた。

場内には一瞬間の間、静寂が訪れた。次の瞬間、ストーンという音が聞こえ、京子の生首が宙に飛んだ。切断面から真っ赤な血液がシャワーのように噴出した。

別の調理人がそれを深鍋に受けた。切断面から噴出する血の勢いが弱まった頃、二人の調理人が研ぎ澄まされた肉切り包丁で、京子の肉体を切り刻んだ。

両乳房を切り取り、腹部に包丁を入れて内蔵を全て抜き取った。長くむっちりとした太腿にも刺身包丁が入られ、新鮮な肉が切取られた。裏返しにされ、すべすべ

で剥き卵のような尻に包丁が突きたてられた。さくさくという小気味の良い音が聞こえて来た。包丁の切れ味は抜群であり、柔肉をさくさくと切り裂いていた。

ブロック大の柔肉が切取られ、刺身包丁で薄くスライスされていく。

一方、意識を失ったままの忍は、うつ伏せに横たえられ、盛り上がった白い尻に刺身包丁を入れられていた。

太腿肉は既に切取られ、大皿の上に盛り付けられていた。観客達が席を立ち、忍の肉を取り皿に取り、席に持ち帰っていく。

調理長の北田は、スライスした尻肉を寿司飯の上に載せ、握りを造っていた。大皿に並べた握り寿司は、あつという間に消えてしまった。

場内は、言いよりの無い興奮に包まれていた。客達は、忍の刺身と寿司を貪り食らった。忍は生きたまま、包丁で切り刻まれ、調理されていく。

また、隣の調理台では、腿や尻肉などが切取られた京子の死体が仰向けにされ、膣部を切取られているところであった。女の象徴に包丁が差し込まれていた。

各テーブルに置かれたシャブシャブ鍋は、ガスコンロの火にかけられていた。客達は、薄くスライスされた京子の尻肉を、熱湯にくぐらせポン酢につけて味わっていた。深い溜息が各テーブルから漏れ聞こえて来た。

「こんなに柔らかく味わいのある肉は初めてだ」

数時間後、生前は多くの男女を魅了した忍と京子の肉



体は、そのほとんどすべてを切り裂かれ、調理され、客達の胃袋に収まっていた。

その頃、そのレストラン近くにあるホールでは、片桐が一人掛けのソファに座り、新聞に目を通していた。時折、自然な感じで、閉ざされたレストランのドアを見詰めた。近くには、黒色のスーツを着た若い女がふたり、待機していた。ふたりとも超がつくほどの美女だった。

片桐は新聞を小脇に抱えて立ち上がり、レストランの入り口に向かって歩き出した。

「お客様、こちらのレストランは貸し切りとなっておりますので、ご案内することはできません」

二人の女が片桐の前に立ち塞がった。

「そうなんだ。ここの料理は最高だって聞いていたんで、

楽しみにしていたんだがな」

「申し訳ございません」

二人の女は、片桐に頭を下げた。

「まあ、いいか。他を探すよ」

それだけ言って、ふたりの女に背を向けた。

その夜、深夜零時頃、人肉宴会が行われた三階レストランに通じる廊下を、黒い影がふたつ走っていた。上下黒色のスーツを着込んだ片桐と、黒色のドレスに身を包んだ綾乃の二人であった。片桐は付近に人影が無いことを確認してから、レストランのドアノブに手を掛けた。

思ったとおり施錠されていた。片桐は懐からキービック

を取り出し、鍵穴に差し込んだ。二、三秒で開錠される音が聞こえた。

片桐は綾乃に目で合図を送り、ドアノブを回した。オート製の重厚なドアが音も無く開いた。内部は非常灯の明かりのみで薄暗かった。二人は聞き耳を立て、警報装置が作動しないかどうか確認していた。片桐が背中に背負ったナップザックから、長さ十五センチほどの黒い箱を取り出し、室内でそれをゆっくりと動かした。箱にはグリーンランプが点灯していた。

「室内に監視装置は無いようだ。奴らまったく警戒していないようだな」

片桐は、綾乃の耳元で囁くように言った。綾乃が大きく頷いた。片桐はナップザックから、暗視ゴーグルをふ

たつ取り出してひとつを綾乃に渡し、残りを被った。鮮明な画像が視線に飛び込んできた。綾乃が親指でOKのサインを送ってきた。

二人はまず、レストラン中央にもある仮設の厨房に足を踏み入れた。そこはきれいにかたづけられていた。綾乃は床に顔を近付けて、何かを探していた。

すぐに片桐の方を向き、床の一箇所を指差した。直径五ミリほどの黒いシミのようなのが床に付着していた。

片桐は、ナップサックから小ビンと長さ五センチほどの針を取り出して綾乃に手渡した。綾乃はそれを受け取ると、床に付着した黒いシミを、針の先で削り取り小瓶に入れた。それを片桐に手渡した。片桐は受け取ってから、レストラン奥にある備え付けの厨房を手で指し示し

た。

ふたりは足音を忍ばせて、その厨房に足を踏み入れた。ドアを開けたとたん、むっとする血臭が噴出してきた。ふたりは自然に眉をひそめていた。

非常灯の薄暗い光の中に、巨大な鍋や、フライパンが整然と並べられている様子が見えた。すぐに調理台の上に置かれた黒いビニール袋に気がついた。

片桐がビニール袋の口を開けた。中を覗きこんだ綾乃が口に手を当て、床にしゃがみ込んだ。片桐は視線を反らすことなく、袋の中身を見続けた。そこには若い女のものと思われる生首がふたつに、肉を削ぎ取られた大腿骨や尾骶骨などの骨がぎつしりと詰まっていた。綾乃は床に手を付き、嘔吐していた。

片桐はナップサックから、デジタルカメラを取り出し、袋の中身を撮影した。

撮影を終え、片桐は、綾乃の嘔吐物を近くにあった濡れ雑巾で拭き取ってから、綾乃の肩を抱いて、厨房を後にした。

「大丈夫か？」

五分後、片桐と綾乃は、片桐の部屋に備え付けのバスルームにいた。綾乃が洗面台の上に伏せて、ゼイゼイと荒い息をしていた。片桐は優しく綾乃の背中を擦っていた。

「史郎は平気なの？」

少し落ち着いたらしく、綾乃が片桐の顔を見詰めて言った。

「そうでもないさ。俺だってあんなもの見たくはないよ」

片桐が見詰め返した。

「そう。安心したわ。もう大丈夫よ」

綾乃が片桐の胸に抱き付いた。

「一緒にシャワーでも浴びるか？」

綾乃のうなじからは香水のいい匂いがした。

「いいわね。その後で作戦会議？」

綾乃が見上げてきた。

「ベッドの中でな」

片桐は綾乃の髪を優しく擦りながら、笑顔を見せた。

二十分後、ふたりはダブルベッドの中にいた。

「やはり、一課の捜査結果どおりだったな」

片桐が天井を向いて言った。

「そうね。信じられないことだけど。人が人を食べるなんて……」

綾乃は片桐の腕枕に頬をもたげていた。

「歴史的にはそんなに珍しいことではない」

「そうらしいわね。で、これからどうするの？」

綾乃が片桐の男根を右手で弄びながら、尋ねてきた。

「今日、入手した情報を本部に送る。応援を呼ぶためだ。」

その役は君に頼みたい」

「どうやって？携帯は通じないし。公衆電話も盗聴されているんでしょ」

男根の竿の部分を強く握り締められた。

「奴らが使っているパソコンを使うんだ。電子メールで送ればいい」



「そうね。その手があったわね。フロントにノートパソコンがあるのを見かけたわ。それが駄目でも他にある筈  
だわ」

綾乃の右手が、緩慢な動きで片桐の男根を扱き始めた。

「俺は、妨害電波の発生源を潰すつもりだ」

「気をつけてね」

「君こそ。無茶をするなよ」

それから、少しの間沈黙が続いた。

「……ねえ。史郎」

綾乃が思い詰めたように言った。

「うん？」

「……」

「どうした？」

「生理が遅れているの……」

それを聞いて片桐が急に起き上がった。

「本当か？」

「うん」

「帰ったら、病院に行くんだ」

「……できてたら、墮ろせというの？」

綾乃の声は上擦っていた。

「違うよ。検査のためだ」

片桐が綾乃の顔をじっと見詰めながら言った。

「産んでいいの？」

「当たり前だ。綾乃は独身だし。俺はカミさんと別れて

三年になる」

「嬉しい。好きよ。史郎」

「俺もだ」

綾乃は起き上がり片桐に抱き付いてきた。ふたりは激しい勢いで互いの舌を貪り合った。

### 第三章 肉奴隷

深夜零時過ぎ、綾乃はフロントから人影が消えるのを見届けていた。綾乃はロビーのソファアに座り、フロントマンがトイレに行くのを待ち構えていたのだ。小走りに、フロントの中に入った。目指すノートパソコンのエンターキーを押した。都合のいいことに電源は入ったままだった。スクリーンセーバが消えてウインドウズのデスクトップ画面になった。すぐにメールソフトのアイコンを発見し、それをダブルクリックした。

メーラが起動するまでの十秒足らずの時間が、数分にも思えた。メールは設定されており、外部に送ることが可能だった。メールアドレスを入力し終えた時、背後に人の気配を感じた。

「此処で何をしているの？」

若い女の声が聞こえた。

「済みません。無断でパソコンをお借りして。友人にメールを送りたかったんです」

綾乃はゆっくりと振向いた。ホテル副責任者の楊が、真紅のドレスを着て微笑んでいた。

「どうぞ。いいですよ。奥にあるパソコンをお使い下さい」

「いえ、今日は帰ります。急な用事を思い出したので」  
綾乃は腕時計を見る振りをしながら言った。その時、背後から抱きつかれ、刺激臭のするハンカチで口を押さえられた。瞬間に意識を失った。フロントマンの男が意識を失った綾乃を抱えるようにしてフロント奥にある個

室に消えた。

深夜のロビーには彼ら以外の人影は見られなかった。

綾乃は裸電球のみの明かりで、照らし出された広さ十畳ほどの部屋で目覚めた。産婦人科で使う分娩台の上に両手両足を縛り付けられていた。股間に重たい疼きを覚えていた。頭をもたげると何かが股間で蠢いていた。

「お目覚めかい？」

ホテル副責任者の楊が、綾乃の愛液で濡れた顔をあげた。

「何をしているんですか？」

綾乃の声は少し震えを帯びていた。

「けっこう。落ち着いているじゃないか。さすがは、公

安警察の犬だね。何をしているかって。お前のマ\*コを舐めているのさ」

「……何を言っているんですか？私は、旅行代理店……」

「調べはついているんだよ」

綾乃の言葉は楊の声に遮られた。

「……」

「それにしても、お前はいい身体をしているね。最高の余興になるよ。婦人警官の味はどんなかな」

楊は再び、綾乃の股間に口を付け、舌で膣やクリトリスを舐り始めた。

「止めて下さい。そんなことしないで……」

楊は綾乃の言葉を見殺して、クンニリングスに集中していた。綾乃は楊の愛撫に溺れまいと必死に意識を集中

しようとしていた。額から冷や汗が溢れ出すのがわかった。楊の愛撫は、凄まじいまでの快楽を綾乃に与えていた。

女でしかわからない絶妙な弱点をついてくるのだ。耐えられるものでは無かった。

綾乃はいつしか喘ぎ声を上げていた。眉間に美しい皺を寄せ、背筋を仰げ反らせ、喘いでいた。あまりの快感に腰が自然と動いていた。

一度目の絶頂が迫っていた。不意にアヌスに指先を差し込まれた。これまで感じたことのない快感が背筋を走り抜け、全身を震わせた。楊の顔面に潮を吹きながら、絶頂に達した。

「最初から潮を吹くとは、何て淫らな女なんだろうね」



途切れ途切れの意識の中で、楊の哄笑を聞いていた。

すぐに、クリトリスを舐められた。微妙な振動を舌先で与えられた。今少し前に逝った筈なのに身体は、すぐに反応し始めた。

「お願い……。もう許して……。…」

綾乃は、余韻に浸りながら緩慢な調子で言った。楊はそれには答えず、妖艶な笑みを浮かべながら、クンニリングスを続けた。

それから半日にも渡り、綾乃は楊のクンニリングスを受けた。何度逝かされたかわからなかった。何ども失神と覚醒をくりかえしていた。頭の中に靄が広がっていた。

不意に下半身を解放された。綾乃は霞んだ視線の中で、楊がワインボトルをラッパ飲みに行っている様子を見てい

た。楊は全裸で、腰には巨大な張形を装着していた。

「お前はこれを飲みな」

楊は、綾乃の頭を持ち上げ、五百CCの缶ビールを口に押し付けた。綾乃は食べるように冷えたビールを喉の奥に流し込んだ。

「これから、本番だよ。マ\*コが擦れるほど犯ってあげるよ」

楊によって、両太腿を持ち上げられ、剥き出しにされた膣にズブリといった感じで張形を差し込まれた。乳房を口に含まれ、激しい勢いで張形を出し入れされた。膣内が巨大な張形でいっぱいに満たされた。

「こいつはね。特殊仕様なんだよ」

楊の音が耳元に聞こえた。次の瞬間、膣内に異様な振

動を感じた。それはピストン運動に加え、複雑な振動を発生していた。膣壁に微妙な刺激を与えられた。楊に乳首を吸われながら何ども、その張形で逝かされた。

「こいつを塗ると天国にいけるのよ。一日中、逝きっぱなしになるの」

楊は、化粧品を入れるようなチューブを綾乃に見せ付けた。綾乃は、半日以上も同性の楊に性的な拷問を受け、視点が定まらぬほど憔悴しきっていた。

「止めて……。そんなことしないで……」

綾乃は弱弱しく囁くように言った。楊はそれには答えず、チューブから白い軟膏を絞り、指先に付けて、綾乃の剥き出しにされた膣やクリトリスやアヌスに塗り込めだ。

「うっ……」

冷たい感触のすぐ後で、疼くような快感が襲ってきた。

何も考えられなかった。ただ、誰かに舐めて犯してもらいたかった。

楊に抱き上げられ、ベッドに横たえられた。縛めをさ  
れているわけでは無かったが、逃れようという気は起き  
なかった。

自然と、自分の股間に手がいつていた。空いている方  
の手で豊かな乳房を揉みながらオナニーに浸った。自然  
に声を出していた。これまで感じたことの無い、目くる  
めくような快感の波に襲われていた。

「舐めて！」

綾乃は誰とも無く絶叫していた。

「いいわよ。でもお前が先に舐めるのよ。私を逝かせてくれたら、ご褒美をあげるわ」

目の前に楊の股間が迫って来た。綾乃は何も考えず、楊の尻を両手で押さえ込んで、貪るように膣やクリトリスを舐めた。同性の性器を舐めるのは始めてのことだったが、嫌悪感は覚えなかった。素晴らしい味がした。楊に剥き出しのアヌスを指先で弄られた。それだけで逝きそうだった。

その頃、片桐はホテルを抜け出し、ホテル正面に聳え立つ、断崖絶壁を素手で攀じ登っていた。一步間違えば、数十メートル下の地面に叩きつけられる危険な賭けをし

ていた。上下黒色のスーツを着て、懐にはシグザウエル P 二二六を携帯していた。綾乃が敵の手に落ちたことは知る由も無かった。

時刻は深夜を過ぎており、ホテル客に発見される恐れは少なかった。

足場を確保しながら、少しずつ確実に登っていた。額から大粒の汗が流れていた。ザイルもハーケンも無しに、両手の力だけで登っているのだ。

遙か上方から光が漏れていた。妨害電波源と思われる施設からのものだ。

約一時間をかけて何とか登り切った。そこは、施設から十メートルほど離れた場所であり、灌木の茂みのために施設からは死角となっていた。片桐は、その場に仰向

けになり、十分ほど動かなかった。遅しい胸板が、深呼吸のために大きく上下していた。

軽く休憩を取ってから、起き上がりショルダーホルスターからシグザウエルを引き抜き、サイレンサーを銃口に装填した。

片桐は茂みの奥から、施設を観察していた。建坪三十坪ほどの二階建てであり、鉄筋コンクリートで建てられていた。近くに高さ二十メートルほどのアンテナが聳え立っていた。建物の窓からは、照明の光が漏れていた。テレビの音声と思われる音も微かに聞こえていた。

一呼吸おいて、建物に向かって駆け出した。鋼鉄製のドアには鍵がかけられていなかった。ノブを回し、一気にドアを開け放った。一階部分は、オペレータールームと

なっていた。壁の一面にはいくつもの液晶ディスプレイが嵌められていた。

部屋の隅に設けられた応接セットには、技術者と思われる二人の男達がウイスキーを飲みながら、アダルトビデオを見ていた。片桐の姿に驚いたひとりが、立ち上がり事務机の上に置いてあった非常警報装置に手を伸ばそうとした。

小さな擦過音がして、男の額に小さな穴が開き、仰け反るようにしてその場に倒れ伏した。

もうひとりには、もどかしげな手付きで懐から、自動拳銃のベレッタM九二FSを取り出し、片桐に狙いを付けようとしていた。片桐は咄嗟に、床にダイブしながら引き金を絞った。乾いた擦過音がして男の額に小さな穴が



開き、男はソファの上に横たわった。

片桐は何事も無かったように立ち上がり、改めて室内を見渡した。壁一面に液晶ディスプレイが十台詰められていた。それぞれにホテル周囲や内部の状況が映し出されていた。事務机の上に置かれていたノートパソコンは、警戒システムにログインしたままの状態になっていた。

片桐は椅子に腰掛、ノートパソコンを操作した。すぐに妨害電波発生装置の操作メニューを見つけ出した。

マウス操作で、装置を停止させた。

「どうしたの？お前は誰……」

背後から女の声が聞こえて来た。片桐は事務机に置いておいたシグザウエルを引つ掴み振り返り様に引き金を引き絞った。二階へと通じる階段の中ほどに、全裸姿の

女が立っていた。女は額を腕でガードしながら、ベレッタベレッタM九二FSを片桐に向けて来た。片桐の放った第一弾が女の腕に命中した。女の銃弾は、右に反れ、片桐の左腕を掠めた。片桐は椅子に座った状態で引き金を絞り続けた。女の盛り上がった白い乳房に命中し乳首を吹き飛ばした。

女は衝撃で体勢を崩し、階段を転げ落ちた。女は、なおも床に両手を付いて立ち上がりようとしていた。右手にはベレッタベレッタM九二FSが握り締められていた。片桐の銃口が再び火を噴いた。数発の銃弾が、女の背中や、美しい臀部に命中し血飛沫をあげた。

女は前のめりに突っ伏した。盛り上がった血塗れの尻が、ブルブルと震えていた。すぐに動かなくなった。片

桐は、女の背中に銃を向けながら、裏返しにした。女は両目を見開き絶命していた。片桐は、上着を脱いで、左腕の銃傷を調べた。たいしたことは無かった。ただの掠り傷だった。

片桐は、シグザウエルを構えながら、ゆっくりと音を立てぬように階段を上って行った。階段を上り切ると、前方に木製のドアが見えた。ドアは少し開いていた。シグザウエルを構えながら、ゆっくりとドアを開けた。

内部は二十畳ほどの洋間となっており、中央のダブルベッドには、全裸姿の女が、うつ伏せの姿勢でベッドに両手両足を縛りつけられていた。股間からは、バイブレ―タの先端が突き出していた。

「助けて下さい」

女は二十代半ばくらいで、美しい容貌肢体の持ち主であつた。

「どうしたんだ？」

片桐は部屋の様子を観察しながら、女に尋ねた。

「ここに浚われてきて、女の人に……」

女はベッドに顔を付けて、さめざめと泣き始めた。片

桐は、ソファの上に洋服が二着置かれていることを見逃

さなかつた。それらは女物で、ホテル従業員の制服だっ

た。片桐はそのうちの一着を手にとり、襟元に付けられ

た西条というネームプレートを確認した。

「西条さん」

泣いていた女の動きが一瞬止まった。

「当りのようだな。五割の確率だったが……」

片桐は、もう一着を手にして、ネームプレートを確認した。

「もうひとりとは、飯田という名前か？」

「いいえ、我々は、普段は番号で呼び合うの。それはカ

モフラーージュよ」

女は片桐の目をじっと見詰めてきた。

「随分と、諦めが早いな。ここでレズリあっていたのか？」

「あんた……。片桐史郎ね。公安のデカでしよう？」

不意に女が聞いてきた。

「俺は、随分と有名人のようだな」

片桐は苦笑いを浮かべた。

「組織の者であんたを知らないのはモグリよ。顔を知っ

ている者はいなかったけどね。顔を見られたからには、私を殺すんでしょう？」

「状況次第だな」

「状況？」

「俺に協力するのなら、考えてもいい」

「何をしろと言うの？」

女がごくりと生唾を飲み込んだ。

「情報が欲しい。組織に関することすべてだ」

片桐はソファに腰掛、背広の懐から無線装置を取り出

しながら答えた。

「いいわ。どうせ、失敗したら、肉にされて食われるだけだもの。あんたに協力するしか道は無さそうね」

「尋問の前に、することがある。少しの間待っていてく

れ」

片桐は女に銃を向けながら、無線装置のスイッチを入れ、それに繋がっているイヤホンをつけた。これで、女には、相手の言葉は聞こえなかった。

「本部応答願います。こちら片桐です」

「片桐か！何で連絡を入れなかったんだ！」

「済みません。妨害装置が作動していたんです」

「そうか。で、どういう状況なんだ？」

「世界中の名士と言われえる人物が集まっています。政治家や経済界の有力者達です。一課が調査したとおり、人肉パーティーが目的のようです。国内から八組の新婚カップルが来ていますが、彼らは食材にされるようです」

「世界中の名士か……。こいつは厄介な問題だな。片桐。」

事は一刻を争う状況になっている。CIAが動き出した」

「そうですか……」

「こちらの対応が決まり次第、連絡する。調査を継続してくれ。そうそう、綾乃君は元気なのか？」

「ええ。無事だと思います。現在、別行動中なので詳細はわかりませんが」

「そうか。くれぐれも気をつけるんだぞ」

「わかりました」

片桐は無線装置の電源スイッチを切った。

「上司なの？」

女が声をかけてきた。

「余計なことは聞かなくていい」

片桐は無線装置を懐にしまいながら言った。



「私のことは、報告しなかったわね。やはり、殺す気？」

「殺して欲しいのか？」

片桐はサイドテーブルの上に置いてあった小ビンを手にした。中には白い粉が入っていた。

「これは何だ？」

片桐は蓋を開け、少量の白い粉を手の平に載せて匂いを嗅いだ。

「何でも無いわ。ただの風邪薬よ」

「こいつは、麻薬だな。確か……。名前は思い出せないが、コカインと強力な媚薬を調合したものだ」

「あんたには、嘘は付けないわね。そうよ。そいつを付けると、どんなにお堅い女でも淫乱に変身するわ」

片桐は、着ていた衣服を脱ぎ始めた。

「何をしているの？」

女が淫らな笑みを浮かべて、片桐の様子を見ていた。

「これから、こいつをお前の身体で試してみる。こいつは自白剤としても使えるんだ」

「いいわ。あんたに殺されなくても、どうせ組織に狙われるんだから、死んだも同じよ。好きにして。死ぬ前に楽しみたいわ」

片桐は、全裸になり、指先で白い粉を摘み、女の膺とアヌスに塗り込んだ。

ソファに腰掛、少しの間、女の様子を見ることにした。

一分もせずに、女の裸身に劇的な変化が起きた。剥き卵のようにすべすべの尻が、もぞもぞと動き始めた。

「お願い……舐めてちょうだい……」

片桐は女の髪を鷲掴みにして自分の方に向かせた。瞳は空ろで、口元には涎をたたえていた。完全にラリッていた。

「お前が先だ」

片桐は、男根を嘔み切られることを一瞬考えたが、誘惑には勝てなかった。女の半開きになった口に男根を押し付けた。女の口に呑み込まれ、激しい勢いでしゃぶられた。女のテクニクは抜群だった。男を喜ばせるコツを掴んでいた。女の柔らかい舌の感触に我を忘れそうになった。一分もかからず、女の喉に精液を放った。

「約束よ。舐めてちょうだい！」

女が瞳を潤ませて懇願した。

「少し、休んでからだ。その間に尋問する。その後で好

きなだけ犯してやる」

片桐は女の尻をポンと叩いてから、ソファに座り、ブレザーの胸ポケットからデジタル式の録音機を取りだし、録音ボタンを押した。

「組織のことで、知っている限りを話してもらおう。それと、今回の計画についてもだ」

それから三十分程度、女は聞かれるままに組織や計画について、話続けた。

尋問の後で、片桐は女の尻に喰らいついた。盛り上がった白い尻の割れ目に顔を埋め、アヌスを舐った。綾乃のことが一瞬脳裏に浮かんだが、爛れるような快感から逃れることはできなかつた。

女の絶え間の無い喘ぎ声を聞きながら、アヌスや膣を

舐り、最後には黒々とした男根を膺に突き込んだ。うつ伏せになった女の両脇に両手を差込、豊かな乳房を手で弄びながら、縦横無尽に腰を振りまくった。

片桐には女が逝き続けていることが、わかつていた。

薬の作用でこの世のものとは言えない悦楽を感じている筈だ。

片桐が膺内に放った時、窓の外に強烈な光が見えた。

すぐに耳を劈くような轟音が聞こえて来た。へりだ。片桐は咄嗟に判断して、女から離れ、衣服を引っ掴み部屋を走り出た。女を救う暇など無かった。すぐに敵の傭兵達がやってくる筈だ。衣服を着ながら、階段を駆け下り、一階オペレーションルームにあった計器類に向けて、シグザウエルを連射した。ガラクタ同然になった計器類を

尻目に施設を飛び出した。

施設から三十メートルほど離れた場所にヘリポートが見えた。此処に来た時は、照明で照らし出されてはいなく、気付くことは無かった。今、傭兵を満載にしたヘリコプターが強力な照明により、照らし出されたヘリポートに着陸しようとしていた。片桐の周囲に何発もの銃弾が飛来してきた。

片桐は、ヘリコプターとは反対側にある断崖絶壁に向かい、死に物狂いでかけていた。絶壁の手前五メートルのところ、腕時計を填めた左手を松ノ木の太木に向けた。腕時計から、太さ数十ミクロンオーダーのカーボン線に繋がった超小型の銚が飛び出し、崖から張り出した大木の枝に突き刺さった。

片桐は、そのまま、断崖絶壁に飛び出した。腕時計から極細のカーボン線が、伸びていきつつ、摩擦となり落下速度を減速させていた。五十メートルを落下するまでには、安全に着地可能な速度まで、減速されていた。

片桐は衝撃を弱めるために転がるように地面に着地し、すぐ近くに広がる黒々とした原生林に向かって駆け出した。

#### 第四章 人肉オークション

「掘り出し物だったな」

加納が、ベッドサイドに立ち、一心不乱にオナニーを続ける綾乃を見下ろしていた。

「そうね。公安の犬が、最高の余興になるわね」

近くのソファには、楊が全裸でワイングラスを傾けていた。加納が、全身をくねらせ、喘ぎ続ける綾乃の乳房を片手で握り締めた。綾乃の朦朧とした視線が加納を捉えた。

「お願い。入れて欲しいの。おち\*ぽを……」

綾乃が起き上がり、ベッドの上で加納ににじり寄った。

「こいつが欲しいのか？」

加納はズボンのチャックを外し、黒々とした男根を剥



き出しにさせた。

綾乃は、男根に喰らいつき激しい勢いで、口腔性交を始めた。綾乃の意識は朦朧としていた。任務のことも、愛する男の事も忘れさっていた。ただの性奴と化していた。

「むぐっ……。美味しい……」

「淫乱女め！」

加納は綾乃の肩を膝で蹴り、ベッドに転がした。背後から抱き付き、濡れきった膣に挿入した。全身を震わせ鋭い喘ぎ声をあげ続ける綾乃を犬のように犯した。

綾乃はベッドの上に四つん這いになり、楊に美しい尻を向けていた。腰が淫らに動いていた。

「お願い……舐めて！オマ＊コ食べて」

「いいけど。聞くことに答えたなら、好きなだけ舐めてやるよ」

「……」

綾乃は目を閉じて、何ども頷いた。

「他に仲間はいらるだろう？バスの途中から乗ってきた男、確か片桐とかいったね。あいつはどうなんだい？仲間なんだろう」

綾乃は間髪をいれず、大きく頷いた。

「そうかい。聞き分けがいいね。片桐つてもしかして、死に神と恐れられたあの片桐かい？」

綾乃は大きく首を横に振った。

「本当にお前はいい娘だね。ご褒美をあげるよ」

楊は、目の前で四つん這いになっている綾乃の膺に右手の指先を束ね挿入した。ゆっくりとであるが、確実にめり込んでいく。楊はフィストファックを試みようとしていた。

「ああああ……いい……死んじゃう！」

綾乃はベッドに突っ伏し、髪を振り乱し、泣き叫んだ。

楊は身悶えする綾乃にフィストファックを加えながら、

綾乃の美しい尻を美味しそうに舐めていた。

綾乃はベッドの上でひとりオナニーに耽っていた。周りを楊の部下達が取り囲み、その様子を食い入るように見詰めていた。五人の女達は、皆、真紅のナイトドレスを身に纏い、ゆったりとしたソファに腰掛けていた。

「この娘、本当に美味しそうね」

「一号はたいそう、お気に入りのようね」

女達は、名前ではなく番号で呼び合っていた。

「二号だって、そうじゃない。この娘二十三歳だって。

公安に入って間もないようよ。楊様が教えてくれたの」

一号と呼ばれた最も年長と思われる女が答えた。年長  
といっても二十代の半ばくらいだ。

「ねえ。誰から食べる？」

「皆で一緒に楽しんだらいいわよ。二号はオマ\*コ、三  
号は尻の穴、四号と五号はおっぱいって言うのはどうか  
しら。もちろん、時間ごとに交代よ」

一号が皆の顔を見渡した。

「一号、そういう貴女は参加しないの？」

「私はこの娘の口で、オママ\*コとケツを舐めてもらうの。  
いいでしょう？」

「決まりね」

皆、一斉に立ち上がり、衣服を脱いだ。シミひとつない美しい裸身がベッドの周りを取り囲んでいた。

二号が、クリトリスを触っていた綾乃の手をどけて、股間に喰い付いた。三号がそれに続いて、綾乃の尻を持ち上げ、その下に顔を入れた。四号と五号は寝ていても崩れない綾乃の乳房を口に含み、乳房を舐め回した。一号はゆっくりと綾乃の顔の上に跨った。ただ、それだけで良かった。何も言わずとも綾乃は、一号の腰を引いて自分の口により密着させた。

一号は眉間に美しい皺を寄せ、綾乃の顔の上で淫らに

腰を動かしていた。

綾乃は女達に全身を嬲られながら、逝きつ放しの状態だった。何ども二号の顔に潮を吹いた。その度に二号は歓喜の声を上げ、綾乃の膣やクリトリスを舐りまくった。

一時間後、綾乃は一号の上に騎上位となって膣に張形を挿入されていた。背後からは二号が綾乃のアヌスを張形で犯していた。綾乃は髪を振り乱し、喘ぎ声をあげながら、淫らに腰を振っていた。

その横では、まったく同じ状態で、最年少の五号が、三号と四号によって張形で膣とアヌスを犯されていた。

午前一〇時過ぎ、部屋のドアがノックされた。

「入れ」

バスローブに着替えた加納が、部屋の中央に置かれた食卓テーブルに付いていた。シャワーを浴びたばかりなのか、髪が濡れていた。加納の目の前には、顔以外の全身をきれいなキツネ色に焼かれた若い女の死体が銀皿の上に横たわっていた。

女の死に顔は、凄まじいまでに美しかった。昨夜、加納が妨害電波発生源の施設で尋問していた女であった。

「おはようございます」

楊が部下の女二人を引き連れて入って来た。女達は加納に向かい頭を下げた。

「男はまだ、逃走中です。男の部屋で見つけた物です」

楊が、背後に控える部下のひとりに手で合図を送ると、女は前に出て持っていた片桐のポストンバックを加納の

横に置いた。

「拳銃やサブマシンガン等を押収しました」

「後、三時間だけ時間をやる。それまでに奴を捕まえなければ、今度は、お前が肉になれば」

加納はポストンバックを持っていた女に向かって言った。その女は、食卓テーブルに横たわる女の死体を見詰めた。めながら、肩を震わせた。

「承知しました。さあ、何ぐずぐずしているの？さっさと男を捕まえるのよ」

楊が二人の部下に命令した。

「楊。お前は此処に残り、朝食を共にしてくれ。ひとりでは食べきれないんだ」

「わかりました」



楊は、加納の横に座った。女達が出て行くのを見届けてから、楊が口を開いた。

「奴の身元が割れたわ。公安の片桐史郎よ」

楊の口調は、部下達がいたときとはうって変わって、馴れ馴れしくなっていた。

「片桐……。本当か？」

加納が楊の瞳を見詰め返した。

「ええ。綾乃から聞き出したから、間違いないわ」

「そうか。奴が来ているのか……。しかし、後戻りはできない。晩餐会は決行する。脱出の準備だけは怠るな」

「わかっているわよ。ねえ。食べない。冷めちゃうわよ」  
「そうだな。頂くとするか」

加納は素手で、女の太腿肉を引き千切り、皿に載せて

隣の席に座っている楊の前に置いた。

「きれいなロゼに焼きあがっているわね」

楊は腿肉を手にとり、そのまま齧り付いた。

「さすがは、シェフ北村だ。彼は人肉料理の第一人者だからな」

「そうね。ふーむ。塩味が適度に効いて、最高に美味いわ。何度食べても癖になる味ね」

「そうだな。こいつの味を一度味わうと、チキンは食えなくなる」

加納は手に付いた肉の脂をティッシュで拭き取りながら言った。加納は先ほど、肉を掴み取った太腿にそのまま齧り付いて、肉を噛み千切った。

どのようなにして焼いたのか、女の肉は驚くほどに柔ら

かかった。楊は立ち上がり、身を乗り出すようにして、女の尻に喰らいつき、尻肉を直に食べ始めた。

その頃、片桐は原生林の奥深くへと分け入っていた。とにかく、一端は追ってから逃れなければならなかった。

歩きながら、装備を確認した。シグザウエルの銃弾は残り二十発のみであった。ブレザーのポケットには手榴弾が一発入っていた。こいつはかなり頼りになった。武器弾薬はそれがすべてであった、他には小型のナイフに携帯用無線機と小型望遠鏡を所持していた。

携帯無線機にはGPSが組み込まれており、現在位置を確認することができた。それによるとホテルから十キロほど離れた場所にいることになっていた。

不意に近くからヘリコプターの爆音が聞こえてきた。

片桐はエゾマツの根元に平伏し、上空を窺った。奴らが此処に來たのは偶然の筈だ。

どうやらヘリコプターは付近の上空に滞空しているようだった。この辺り一帯は深い原生林が生い茂り、着陸は不可能であるが、ロープを使い降りる手段はあった。

その時、近くの獣道から若い女達の笑い声が聞こえて來た。片桐は、声のする方に顔を向け、様子を伺った。

登山服を着た若い女達の集団が、片桐のいる方に向かい獣道を進んでくるのが見えた。距離は二十メートルくらいであった。人数は六人だった。片桐は彼女達に危険を知らせるべきか迷っていた。

不意に目の前を黒い影が通り過ぎた。一瞬後、若い女の悲鳴が原生林に響き渡った。迷彩服を着て腰にガンベ

ルトをした十名の若い女兵士達が、女達に襲い掛かった。あつという間に六人は、捕らえられ地面に転がされた。四人の女兵士達が、M一六アサルトライフルを構え、周囲を警戒していた。

残りの六人が、泣き喚き助けを乞う女達の衣服を筆りとっていた。すぐに六人の女達は皆、全裸に剥かれた。見張り役を除いた女兵士達が、二十歳前後の瑞々しい裸身に群がった。

マングリ返しにされ、膣やアヌスを舐られる女や、四つん這いの姿勢を取らされ、アヌスを舐られる女や、仰向けにされ豊かな乳房を舐められる女達の泣き声が周囲に満ち溢れた。自動小銃で武装した女兵士の一団を前にして、片桐に為す術は無かった。強引に動けば無関係の

女達が犠牲になる可能性が高かった。女兵士達は、見張り役を交代しながら、女達を舌や手で犯し続けた。

「どいつにする？」

女をマンダリ返しにして膣を舐めていた女兵士が、声をあげた。

「その女にしようよ。一番きれいだし、背もけっこう高いから一杯、肉が取れるよ」

近くにいた女兵士が、最初に皆に問い掛けた女兵士が、蹴っていた女を指差した。

「毎日、果物ばかりで、飽き飽きだからね。新鮮な肉が食べられるよ」

「どうやって料理する？」

「時間が無いから刺身だね。三号。醤油を持っている？」

「あるよ。一号」

「決まりだね」





一号と呼ばれた女が、目の前の女をうつ伏せに横たえ馬乗りになり、ガンベルトに差していたナイフを引き抜いた。地面に横たえられた女の視線が、鋭い切っ先に吸い寄せられた。むきタマゴのように白く瑞々しい尻が、無残に震え慄いていた。

一号は、女の黒髪を鷲掴みにして一気に、首を掻き切った。鮮血が地面に向けて噴出し、女の全身が一瞬、痙攣しすぐに動かなくなった。

床に伏せていた他の女達がいっせいに叫び声をあげ、激しく泣き喚いた。

見張りを除いた女兵士達全員が、ナイフを持ち、死体となった女に群がった。

むっちらりとした太腿や盛り上がった白い尻に何本もの

ナイフが突き立てられ、肉を削がれていった。切取られた新鮮な肉は、醬油をかけられ、生のまま貪り食われた。女兵士達は争うように、女の肉をナイフ切り裂き、頬張った。

一時間後、殺害された女の太腿肉や尻肉はあらかた、食されてしまい白い骨が露出していた。

その後、女兵士達は、捕獲した女達を銃口で小突きながら、片桐の視界から消え去っていった。彼女達が去った後には、下半身を食い荒らされた女の死体が、残されていた。

片桐は無線機に組み込まれたGPSを使い、ホテルに接近することに決めた。綾乃のことが気になっていた。

携帯が圏外の場所なので安否を確認することはできな

った。

歩き始めて十分が経過した頃、片桐は背中に異様な殺気を感じ、地面に伏せた。間髪を入れずに自動小銃の連射音がして、付近の草木が飛び散った。

片桐は匍匐前進しながらミズナラの大木の根元に近付いた。

連射音は鳴り止まず、大木の根元にも数十発の銃弾が食い込んだ。銃弾の着弾状況から見て、複数の射手がいることは間違い無かった。片桐はシグザウエルをシヨルダーホルスターから抜き放った。それを地面に置き、ブレザーのポケットから手榴弾を取り出した。ピンを抜き雷管をシグザウエルの銃握りに叩き付け、敵が潜んでいると思われる方角に投げ付けた。数秒後、大音響とともに

に土塊や岩石が飛び散った。

「二号が殺られたよ」

「馬鹿！ 声を出すんじゃない！」

片桐は声のした方角に銃口を向けて、引き金を二回、引き絞った。二人の断末魔が聞こえて来た。そのまま、今度は敵のいる方角に向かって駆け出した。再び、連射音がして周囲に被弾した。片桐は敵の影を認めては引き金を引き絞った。深い藪に守られ奇跡的に片桐は生き抜いていた。六人を殺害した時点で、敵の銃声は途絶えた。

ホテル十階の大会議室では、宿泊者による競が始まっていた。室内には丸テーブルがいくつも並べられ、数十名の宿泊客が席についていた。大半が四十代以上の中年

男達であり、中には若く美しい女を伴っているものもいた。人種は様様であり、色々な国の言語が飛び交っていた。

「今回、ご用意させていただきました若妻八人を競にかけ、高額で落札された上位三人を落札した方にご提供させていただきます。残り五人は晩餐会で食していただきます」

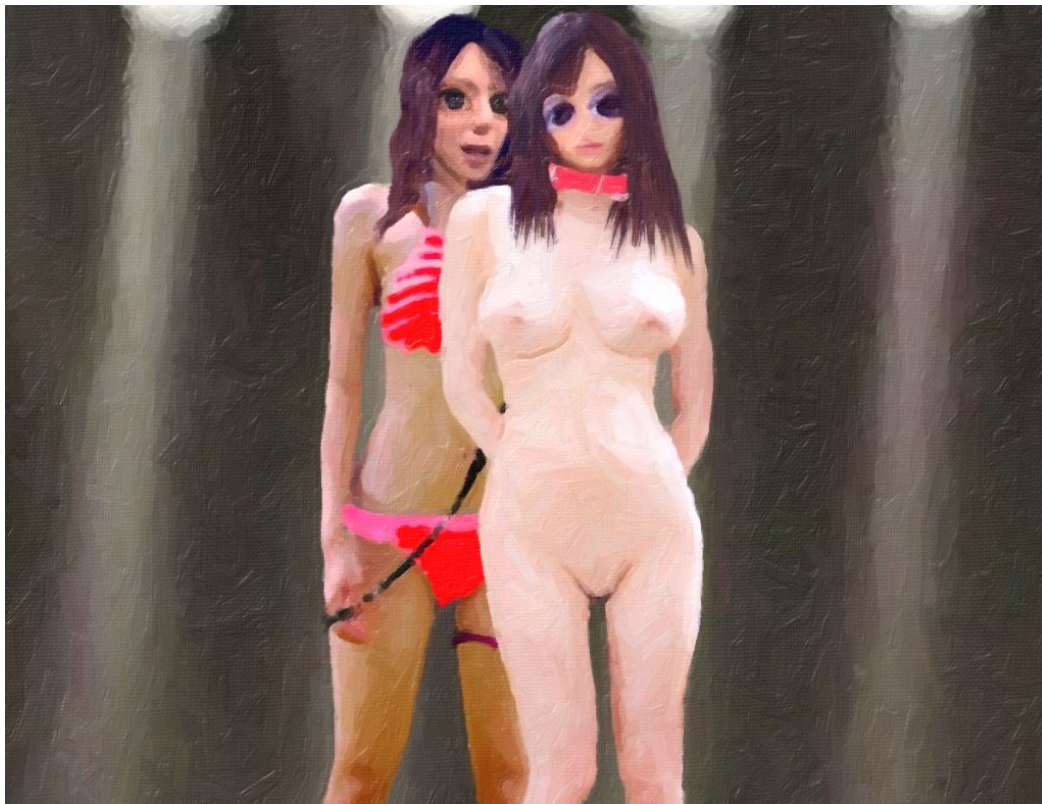
上下黒色のタキシードを着た加納が、仮設ステージに立ち、マイクを取っていた。加納のスピーチは即時に英訳され、スピーカから流れた。傍らには豪華な真紅のドレスに身を包んだ楊（ヨウ）が控えていた。

「それでは、まず一人目からご紹介します」

加納が楊から受け取ったメモにさっと目を通しながら

話した。

「今回、ご提供させていただく、食材のうち最上級と思  
われる女肉です。立花ゆかり。二十五歳です」



加納がさつと左手を上げると、ステージ奥のカーテンが開かれ、全裸に剥かれ鎖のついた犬用の首輪を嵌められたゆかりが現れた。後ろ手に手錠を掛けられ呆然とした表情を浮かべ佇んでいた。ゆかりの傍らに立っていたビキニ姿のコンパニオンが鎖を引き、ゆかりをステージの中央まで引き立てた。

「どうです。素晴らしい肉体の持ち主でしょう。シミ一つない美肌の持ち主です。むっちりとしていて肉付きも最上級です。さあ、皆様、どうぞ直にご確認ください」

加納が言い終わらぬうちに、上下黒色のダークスーツを着た中年男が席を立ち、脱兎のごとくステージに駆け上がった。男の顔を見て、ゆかりが驚きの表情を浮かべ

た。



「久しぶりだな。ゆかり！」

男はゆかりの両肩を鷲掴みにして、叫ぶように言った。

「……」

「お前の肉が食えるとはな。このまま死んでもいいくらいだ」

男の言葉を聞いて、ゆかりはブルブルと震えだした。

「あのお。細田様。お知りあいだったのですか？」

「ああ。俺の会社の社員だった」

「そうでしたか。……済みません。他のお客様が控えて

おりますので、手短に願います」

加納は細田に向かって軽く頭を下げた。

「他の客だと……」

細田は加納を一瞬睨み付け、ゆかりを反対向きにさせ

て、床に片膝をついて、ゆかりの盛り上がった白い尻を両手で割って中を覗き込んだ。細田の顔が深い尻の割れ目に押し込まれ、すぐにピチャピチャとアヌスを舐る音が聞こえてきた。

ゆかりは天井を見上げ、嗚咽を漏らしていた。細田の指が乱暴に、ゆかりの膣に差し込まれ中をかき回した。ゆかりの嗚咽が激しさを増した。

「そろそろ。他の人に交代してもらえませんか？」

加納が細田の肩を掴み押し殺した声で話し掛けた。

「何？」

細田は加納を睨み付けてから、すぐにゆかりから離れた。ステージから降りる際に何度もゆかりの方を振り返った。

ゆかりはコンパニオンによって、ステージ上に置かれたテーブルに横たえられ、濡れたタオルで細田の唾液がついた股間を清められた。ステージのすぐ下で並んでいた次の客がステージに上がり、仰向けに寝かされたゆかりの両足を自分の肩に担ぎ、顔をゆかりの股間に押し付けて、美味そうに膣を舐り始めた。ゆかりは呆然とした表情で天井を見上げていた。

自分の席に戻った細田が、ゆかりがステージ上で延々と陵辱される様子を血走った目で見つめていた。時折「俺の女だ」と呟くように言った。

若妻達八人の品定めが終了したのは、二時間後のことであつた。

ステージ上に八人の若妻が全裸姿で並べて立たされた。

皆、激しい陵辱のためか憔悴しきっていた。

「さて、そろそろ競を開始します。まず一番の立花ゆかりから始めます」

「一億！」

細田が席を立ち、声を張り上げた。

「二億」

近くに座っていた恰幅の良い白人の中年紳士が、落ちて着いた様子で手を上げた。

「三億！」

細田がその中年紳士を睨み付けながら声を荒げた。

「四億」

白人の中年紳士が細田に微笑みかけながら、声をあげ

た。

「二十億だ！」

細田は口元に泡をふきながら、大声で叫んだ。中年紳士が両手を上げ、首を横に振り、苦笑いを浮かべた。

「細田様が落札されました。細田様には申し訳ございませんが、始めに申し上げましたとおり、落札額の上位三名のみご提供させていただきますので、最終的に決定されるまで、お部屋でお待ちいただくか、こちらで競に参加されるかお決めください」

「ゆかりの落札額が上位三位内であれば、俺のものになるんだな。……わかった。それとそうなった場合、ゆかりの旦那をひと時貸して欲しい」

「はい。三位以内であれば部屋までお運びいたします。

選任の料理人も手配いたします。それとゆかりの夫の件

ですが、生命の保証をしていただけるならば、お貸しいたしましょう。奥様方の楽しみにと企画しておりますので」

「それは保証する。ちよつとした趣向を考えているんだ。それから料理人は不要だ。俺はこう見えても料理が趣味なんだ」

細田はそれだけ言って席を立ち、会議室を後にした。

第五章 陵辱の宴

第六章 婦警料理

第七章 若妻達の美肉

完